

巻頭言

川 畑 直 人

臨床心理学にとって研究は大きなチャレンジであると思う。それは、臨床心理学の特殊性に由来している。学問である以上、研究は必要不可欠である。しかし臨床心理学の研究結果が価値を持つためには、臨床実践の現場で、それが役に立たなくてはならない。現場で役立たない理論や知識は、どれだけ美しく見えても、学問のための学問という自己完結的性質を免れない。臨床心理学の成果は、常に現場における検証にさらされることになる。

それでは、現場で役に立つ研究成果が生まれるためには何が必要なのか。現場において行われる検証作業の厳しさは、そこに生きた人間の心があるという事実由来する。しかも、その心は単体としてあるのではなく、常に他者との関係の中で動いている。そしてその関係の在り方は、社会、文化、歴史によって影響を受ける。多種多様な要因によって影響を受け、さらに実体として観察することの難しい人間の心を、なるべく「なま」に近い形で研究対象として扱うことが、臨床心理学では要求される。

こうした厳しい条件のもとで、臨床心理学が陥りやすい危険が三つあると思う。一つは、抽象的な思弁の学に陥る危険である。とらえがた

い心のありようは実証研究に向かないとして、理論と称する蘊蓄ばかりが述べられて終わる危険がある。二つ目は、現実を描写するだけの記述の学となる危険である。事例研究と称して、理論なき現実の描写をいくら続けても、現場に役立つ学問的成果は生まれない。第三は、科学的心理学の名のもとに、複雑な現実の要因を捨象する危険である。単純化された条件下で作られた「実証的」成果は、心の現実を無視した滑稽ともいえる介入技法を生み出す危険がある。

幸い日本の臨床心理学は、科学的心理学の一方的な応用としてではなく、臨床現場の経験、いわゆる「臨床の知」が原動力となって発展してきた経緯がある。今後、その道のりは決して緩やかというわけにはいかない。世界的な規模で経済発展の限界が見えてきた中、エビデンスを求める社会的要請はますます高まっていくであろう。その一方で、臨床の知を汲み上げ、それを理論化し、検証するような学問的な枠組みが十分構築されたとは言い難い。このような厳しい状況の中で、本研究誌は、臨床心理学の発展をけん引する役割を担ってほしいと、心から願っている。